

「挂甲の武人」とは、一体何だろうかと言ふ(いぶかる：不思議に思う)人も、右の画像を見れば、「ああ、あれか。見たことがある」となるでしょう。群馬県太田市出土の“埴輪(はにわ)で、社会の教科書で埴輪というと、この「挂甲の武人」ですね。東京国立博物館の誇る国宝で、その指定50年を記念して、群馬県庁では「とことん！ハニワまつり」が開催されたそうです。ここで話は、十月二十六日の特別授業、岡山理科大学の恐竜博士、石垣忍教授の恐竜特別講座



に飛びます。石垣先生は、アロサウルスの頭骨のレプリカや本物の **挂甲の武人** 尾骨を岡山自主夜間中の教室に、持ち込んでいただき、目の位置は頭骨のどの辺り(あたり)で、従って、どのような見え方をしていたのか、受講生に問いかけながら授業を進めて行かれます。目の位置が決まれば、脳の位置も決まり、さらに、脳の大きさも見当が付いていきます。ただ、恐竜に関する知識を教えるのではなく、受講生と話をしながら、恐竜を題材に、考え方、物の見方を教えるような授業でした。石垣先生は、昔、大阪の夜間定時制高校で教えておられました。ちょうど、私が大阪にいた時とも、数年間、重なっています。少人数ですから、生徒との距離も近く、生徒とのやりとりを軸に授業をされていたそうで、その当時のことを懐かしく思い出したと言っておられました。石垣先生の惹きつける授業と、「恐竜」という、多くの人にとって魅力的なコンテンツが、相乗効果を生み出し、講義の後の「質疑応答」は、多くの質問が飛び交い、熱気のこもったものでした。講義の内容を超えるような壮大な質問も飛びだし、收拾がつくのかと心配になるほどでしたが、さすがに石垣先生には、うまくまとめて頂き、講義は大成功の内に終了したわけです。ここで、「挂甲の武人」です。たまたま、講義の後、NHKの「みんなのうた」を見てみると「挂甲の武人」を題材にした歌が出ていました。「挂甲の武人モーメント」といい、その歌詞には“授業の発表の前、講演会の質疑応答タイム、プレゼンの直前、みんなして“挂甲の武人”のような顔になって固まってしまう時間はありませんか？”うつろな目、何か言いたげに開いた口、ぎゅっと握った手”そんな“モーメント”を解くための歌。”とあります。今回の講義の後の、皆さんの熱気は、これと無縁のものでした。しかし、ここで「数楽通信」としては、数学の話題にしてみましょう。数学の試験の時には、この「挂甲の武人モーメント」にしばしばなってしまうのです。この所を考えてみましょう。夜間中で、授業をしていても、生徒の皆さんから、数学の問題を解くときに、頭の中が真っ白になる、固まってしまう、といった声を聞きます。そこで、特に最近感じるのは、“数学の問題は、ぱっと解けなければいけない”。問題は、頭の中で解けなければいけない”といった思い込み、呪縛があるということです。小、中学校で算数、数学ができていたのに、高校から数学が出来なくなったという人も、このパターンが多いような気がします。一気にやろうとすると、どこかで壁に当たります。たとえば、高いところに昇ろうとすると、飛び上がるのは1メートル程度。高飛びのオリンピック選手でも2メートル少しです。ですが、一歩ずつ、二十cmでも歩いて行けば、富士山の頂上まででも、一日か二日で登れます。校歌の「明日への道を一歩ずつ」です。それを、数学の授業でも、目指していきましょう。ですので、まずは、最初の一步を一緒に歩き出しましょう。